

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月23日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320099

研究課題名（和文） 近世起源の在日異邦人（朝鮮人）に関する研究

研究課題名（英文） Study on foreigner(korean) of the early modern times origin residing in Japan

研究代表者

趙 景達 (CHO KYEUNGDAL)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：70188499

研究成果の概要（和文）：近世の薩摩藩には、豊臣秀吉の朝鮮侵略の際に連行されてきた朝鮮人の村があった。苗代川である。本研究は、この村の歴史を近世から近代にかけて明らかにすることによって、幕藩体制の性格を地域から照射するとともに、民族差別の性格を長期的視野のもとに解明しようとしたものである。その結果、薩摩藩の分離主義的傾向と朝鮮人差別の近代的様相が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In early modern times at Satsuma-Han, there was a village named Naeshirogawa, where Korean immigrants had lived since Toyotomi's invasion. This study started to know the history of the village from pre-modern to modern times, and aimed to show the characteristics of Shogunate from the district. Also to deepen the understanding of the history concerned to reveal the nature of the racial discrimination. As a result, this study clarified the tendency of separatism of Satsuma and the modern aspect of the discrimination.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2009年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2010年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2011年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
総計	15,100,000	4,530,000	19,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本史

キーワード：近世史 近現代史 在日朝鮮人史 交流史 差別 陶磁器 異邦人

## 1. 研究開始当初の背景

（1）近世日本を通じて、薩摩藩には極めて特殊な集落があった。苗代川（現在鹿児島県日置郡東市来町美山）である。この村の起源は、豊臣秀吉が朝鮮を侵略したときに遡る。この戦争に従軍した薩摩の島津義弘が朝鮮から連れ帰った虜囚が、この村の始祖たちである。彼らはここに強制的に集住させられるとともに薩摩藩の保護を受け、陶工の村を作

り上げた。彼らは当然に役負担もし、中には士分に取り立てられる家門も現れた。しかし不思議なことに、彼らは徐々に周辺の百姓と同化しつつあったにもかかわらず、薩摩藩はこれを許さず、朝鮮の習俗を維持するように命じた。1695年のことである。以後彼らは逆に失いかけた朝鮮習俗を必死に維持し、さまざまな艱難辛苦を乗り越えて近世から近代を経て現在まで営々と生活を重ねてきた。

(2) 苗代川の朝鮮人は、定着以来艱難辛苦の生活を営んでは来たが、近世社会での差別は近代以降における差別とは次元を異にするものであった。近代日本の草創期において、彼らは一般の日本人とともにその建国の一翼を担いはした。しかし、朝鮮名で生きていくことは差別の中を生きていくことを意味し、アイデンティティの葛藤がもたらされた。日本はかつて身分制の厳格な近世社会であっても、異質な者との共生が可能な社会を形成していたが、今やそうしたことが容易ならざる社会となったわけである。この差別は一見、のちに始まる在日朝鮮人差別と本質を同じくしているように見えるし、近代日本における民族差別の原初的形態と見ることもできる。しかし、近代日本の建国に寄与した苗代川の住民のアイデンティティは、近代になって日本に移住してきた朝鮮人のそれとはかなりの違いがあった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の第1の目的は、近世社会において特異な異邦人として存在し続けた苗代川の人々の歴史から、幕藩制国家の歴史的特質について新たな視座を獲得しようとするところにある。近世を通じて苗代川のような村は他藩に類例を見ない。朝鮮から連れてこられた陶工は、各藩の保護を受けながらも、みな日本人に同化したし、また藩権力もそれを阻止するようなことはなかった。そのような中で、薩摩藩だけが何故にそれを阻んだのか、を明らかにしようとした。

(2) 本研究の第2の目的は、民族差別の問題を、近世と近現代を通観する問題を解き明かす中で考えるところにある。周知のように在日朝鮮人問題は、基本的には1910年の韓国併合を機に始まったものである。一般的な在日朝鮮人問題と苗代川の問題は、本来は区別されるべき問題である。しかしながら、苗代川の問題を見ることによって、一般にいうところの在日朝鮮人問題の本質を逆照射しようとした。

## 3. 研究の方法

(1) 研究代表の趙景達を統括責任者とし、その下に前近代研究班と近現代研究班の2つの研究班を置いた。さらに、その下に各研究分担者の具体的な研究テーマを位置づけた。4年間を通じてフィールドワークなどの調査は両班合同で行い、また調査の成果を共有するための合同の研究会も頻繁に開催し

た。

(2) 前近代研究班：日本の他地域には決して存在しない朝鮮人を隔離して居住させた村落である苗代川の歴史的特性と、ここに居住した彼ら異邦人の生活・慣習を解明し、彼らと近世国家・社会との関係性を考察した。さらに、薩摩藩の国家意識や独自性を浮き上がらせ、幕藩体制国家の特質を再構築しようとした。そして、苗代川に隔離された朝鮮人をめぐる村落支配のあり方、彼らの生活・社会文化を解明し、従来の幕藩制的身分論・身分的周縁論を批判しつつ、まったく新たな近世社会文化史を構築することに努めた。これは久留島浩と須田努が研究を分担した。また、近世対外交渉史を専門にしている鈴木文を研究協力者とした。

(3) 近現代研究班：近代に入ると、帝国日本の脱亜的方向性および植民地支配によって、日本国民のなかに、民族差別の意識が形成されていった。この民族差別の問題を、江戸時代から朝鮮人が居住していた苗代川という特異な地域から考察した。近代の苗代川の地域的特性を解明し、帝国日本がここに住む人々をいかに編成していったのかを分析し、帝国臣民にならざるを得なかった彼らの動向を分析した。さらに、帝国日本の内側で日本国民とされていった苗代川住民の主体的生き方を明らかにするとともに、民族差別・在日朝鮮人差別の本源的な歴史性を考察した。これは檜皮瑞樹・愼蒼宇・小川原宏幸・宮本正明・趙景達が研究を分担した。

## 4. 研究成果

(1) 前近代研究班では以下のことが明らかにされた。

①「苗代川が存在から見る薩摩藩の華夷意識」(須田努)

琉球との交易を独自に展開し、異国という存在を強く認識していた薩摩・島津家という視点から朝鮮侵略を分析した結果、「持続する中世」の体制をもった薩摩の特性が明らかにされた。薩摩は一種独立国を形成し、苗代川という朝鮮人隔離村落は、属国を持つ帝国のごとき薩摩「国家」をイメージさせる装置であった。

②「近世村落としての苗代川の特性と異邦人という身分」(久留島浩)

朝鮮人が隔離され村落を形成していた空間は日本のどの地域にも存在しない。薩摩藩は、彼ら異邦人たちを幕藩制的身分秩序のなかにどのように包摂しようとしたのか。従来の身分的周縁論をよりゆたかにする議論が見出された。

③「苗代川の異邦人=在薩朝鮮人のアイデンティティ」(鈴木文)

苗代川の異邦人たちは、薩摩藩による近世村落としての行政支配を受け、これが改編されていくなかでも、朝鮮人としてのアイデンティティを維持しようとしていた。この問題を18世紀から19世紀にかけて考察した。現地での聞き取り調査を多面的に行い、玉山神社という鎮守信仰のあり方なども分析するなかで、苗代川住民の主体的な生活・文化の形成などを解明することができた。

## (2) 近現代研究班

①「近代移行期の苗代川の特長」(檜皮瑞樹)

19世紀の薩摩藩は、富国強兵政策を掲げ独自の存在を誇った。その起点に調所広郷の経済政策がある。苗代川にはこの調所を顕彰した碑が建立されている。調所と苗代川の関係が明らかにされたことによって、苗代川が幕末期薩摩藩に多大な貢献をし、そのことが間接的にせよ、討幕運動にもなにかがしかの影響

を及ぼしたといえる。

②「苗代川の異邦人と戦争」(慎蒼宇)

廃藩置県後、薩摩藩の在支配終了後における苗代川の存在の様相や、苗代側の異邦人が国家にどのように扱われていたのかを考察した。また苗代川住民たちが、帝国日本の対外戦争をどのように認識し、自己を帝国日本の中にいかに主体的に位置づけていったのかを考察した。その結果、同化と異化の論理が帝国日本につねに通奏していることが明らかになった。

③「朝鮮蔑視観の成立と韓国併合後の苗代川」(趙景達)

近世において陶器製作という高度な技術を有し、誇り高く生き抜いた苗代川の異邦人たちは、明治維新とともに薩摩藩による苗代川の隔離政策が終焉したことによって、日本人との血縁関係や交流もより拡大していくかにみえた。しかし、苗代川の近代は差別の歴史であった。それは「もう一つの隠された在日朝鮮人史」というべきであり、近代日本における在日朝鮮人問題の起源が実は前近代からの延長線上にあることが明らかにされた。

④「苗代川に見る在日朝鮮人の生き方」(小川原宏幸・宮本正明)

2度外務大臣となった東郷茂徳は苗代川出身であることを隠し「日本人」として生きた。帝国日本の国家エリートとなった東郷の生涯は、苗代川人の生き方の一つの典型である。ただし、彼の生き方は一般化できず、苗代川人にはさまざまな陰影がついて回っている。現在にも受け継がれている苗代川の慣習・風俗、祭礼なども調査したことによって、彼らの葛藤するアイデンティティの様相が明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

① 趙景達「韓国併合」の論理とその帰結—アジア主義と同化主義の行方』『朝鮮史研

- 研究会論文集』査読無、49号、2011、pp.29～50
- ② 須田努「近世人の朝鮮・朝鮮人観」原尻英樹他編『日本と朝鮮—比較・交流史入門』明石書店、査読無、2011、pp.103～128
  - ③ 久留島浩「画像資料と歴史認識—『朝鮮通信使一行は鶏どろぼう』をめぐって—」国立歴史民俗博物館編『「韓国併合」100年を問う—2010年国際シンポジウム』岩波書店、査読無、2011、pp.287～300
  - ④ 慎蒼宇「朝鮮強占」100年と日本の植民地責任』『インパクション』査読無、174、2011、pp.81～92
  - ⑤ 趙景達「戦後日本の朝鮮史研究」『歴史学研究』査読無、868、2010年、pp.1～12
  - ⑥ 須田努「江戸時代民衆の朝鮮・朝鮮人観」『思想』、1029、査読無、pp.151～169、2010
  - ⑦ 趙景達「植民地近代性論批判序説」『歴史学研究』査読有、843号、2008、5～27
  - ⑧ 檜皮瑞樹「19世紀におけるアイヌへの眼差しと政治文化—アイヌ墳墓盗掘事件」深谷克己編『東アジアの政治文化と近代』査読無、2009、pp.245～266
  - ⑨ 宮本正明「日本占領期における朝鮮人の移動と日本政府の対応・認識」『シンポジウム いまなぜ国民国家か—国民国家の過去・現在・未来 報告書』査読無、2009、査読無、pp.79～85

[学会発表] (計5件)

- ① 慎蒼宇「朝鮮半島の「内戦」と日本の植民地支配—韓国軍事体制の系譜」歴史学研究学会大会近代史部会、2011年5月22日、専修大学
- ② 久留島浩「幕末維新期の「武士」」19世紀研究会、2010年11月27日、明治大学
- ③ 趙景達「近世朝鮮の地域社会と民衆運動」19世紀研究会、2010年11月27日、明治大学
- ④ 檜皮瑞樹「境界・マイノリティ・周縁への／からの歴史学」早稲田大学史学会、2008年6月27日、早稲田大学
- ⑤ 須田努「18世紀、日本の大衆芸能にみる近世人の朝鮮観」『「アジア民衆史」は可能か?』2009年9月21日、歴史問題研究所(ソウル)

[図書] (計3件)

- ① 趙景達・須田努編『比較史的にみた近世日本—「東アジア化」をめぐって』東京堂出版、2011、361頁
- ② 安田常雄・趙景達編『近代日本のなかの「韓国併合」』東京堂出版、2010年、266頁
- ③ 久留島浩・趙景達編『国民国家の比較史』

有志舎、2010、464頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

趙景達 (CHO KYEUNGDAL)  
千葉大学・文学部・教授  
研究者番号：70188499

### (2) 研究分担者

佐藤博信 (SATO HIRONOBU)  
千葉大学・文学部・教授  
研究者番号：60134342

久留島浩 (KURUSHIMA HIROSHI)  
国立歴史民俗博物館・教授  
研究者番号：30161772

須田努 (SUDA TSUTOMU)  
明治大学・情報コミュニケーション学部・教授  
研究者番号：70468841

慎蒼宇 (SHIN CHANGU)  
法政大学・社会学部・准教授  
研究者番号：80468222

檜皮瑞樹 (HIWA MIZUKI)  
早稲田大学・附属研究所・助教  
研究者番号：00454124

小川原宏幸 (OGAWARA HIROYUKI)  
同志社大学・言語文化研究センター・助教  
研究者番号：10609465

### (3) 連携研究者

( )  
研究者番号：